



Title	津田左右吉にみる戦前と戦後の間 : 「科学」をめ ぐって
Author(s)	一瀬, 陽子
Citation	大阪大学言語文化学. 2005, 14, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77903
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

津田左右吉にみる戦前と戦後の間

－「科学」をめぐる－*

一瀬 陽子**

キーワード：科学、言語文化学、学際性

Here in this essay, we try to position the essence of the studies of the Japanese intellectual, Sokichi Tsuda (1873-1961). Tsuda's studies should be placed within the realm of "Linguisticulture," meaning the interdisciplinary study of linguistics/culture. For example, one of his chief works, "An Inquiry into the Japanese Mind as Mirrored in Literature," is a study of the Japanese mind, the material for which is gathered from Japanese literature. Also it contains many analyses of Japanese culture. Thus, it is the hypothesis of this essay that the essence or nature of Tsuda's work lies within the interdisciplinary form of Linguisticulture, as opposed to belonging to historical studies, as has been often said.

Tsuda's works have been critically approached by historians, although they often failed to understand Tsuda because of the large number of works written in his lifetime. In correcting this misunderstanding, here we seek the essence of his works. To do this, we compare Tsuda's study with the "historical science" of historian Sho Ishimoda (1912-1986) and that of historian Saburo Ienaga (1913-2002), both of whom were under the influence of Tsuda's study. They read Tsuda critically, and were willing to develop the "historical science." Here, we consider the inclination of making "historical science" an axiom. We show when the aforementioned term was produced in Japan, the contexts in which the term was used, and then try to find the reason why they thought Tsuda's works written before WW II were his only invaluable ones, allowing his post-war works to go unevaluated. They said that Tsuda's position changed when he began his criticism of the "historical science." However, Tsuda himself maintained that his position remained unchanged. We try to analyze the characteristics of his works from the viewpoint of Tsuda himself.

The reason why the two historians keenly criticized Tsuda's works written after

* Sokichi Tsuda's Works Written after WW II: What Is the "Historical Science?" (ISSE Yoko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

WW II was that they did not like his criticism of Marxism and "historical science." This, in turn, led to an inability of historical science to inherit the works of Tsuda. Eventually, after the middle of the 1950s, the "historical science" was no longer interdisciplinary, and that is when they started to misunderstand Tsuda. In the context of Marxism the word "science" often does not contain literature or psychology. The "historical science" unfortunately could not make out the essence of Tsuda's work in its entirety, which is considerably interdisciplinary and may be referred to as works of "Linguisticulture."

1 はじめに：「津田史学」への問い

本稿は、津田左右吉（1873－1961）の学問（以下、「津田学」と略記する¹⁾）の本質に関する研究である。古事記・日本書紀研究の碩学であった津田は戦前から戦後にかけて、古代文学分野だけでなく、歴史学の分野において積極的に吸収され、批判的に継承されてきた。

津田は大正時代から昭和時代にいたるまで膨大な量の著作をあらわしている。なかでも『文學に現はれたる我が國民思想の研究』（1916～21）は初版本で4冊にわたる大著であり、古代文学から近世文学にわたり網羅的に研究されている。文学作品にあらわれた「國民思想」について通時的に記述するという手法がとられ、日本文化についての議論も多い。死の間際まで何度も手が加えられ、津田にとって思い入れがあったであろうこの書の研究対象は古代にとどまらない。非常に広い視野をもった知識人であったといえよう。

本稿の問いは、津田学は歴史学の範疇におさまるものだろうかということである。全

¹⁾ 本稿では、津田の学問を「津田史学」とは呼ばない。「津田学」は、学問的著作のみならず、津田の言説すべて一公表された著作だけではなく、生前には非公表であった日記なども含む一をさす包括的な概念であり、「津田史学」よりも広義の、「津田が学んだこと」くらいの意味であるところに定義しておく。

²⁾ 伊藤(1999)は、津田学を日本文化論としてとらえており本稿の先行研究となるが、津田学の学際性について指摘するにいたっていない。伊藤はニュージーランドのウェリントン・ヴィクトリア大学日本語科で津田の著作を教材としている。津田は内外で再評価されつつある知識人であり、従来の理解を批判し「言語文化学」として津田学をとらえなおすことは意義があると考ええる。

「言語文化学」がこれまで目指してきたのは、言語と文化全般にかかわる、学際的でより広い研究領域を扱う学問であろうとすることであった。言語と文化は別々のものとして扱われがちであったが、1996年、言語と文化を一体のものとした「言語文化学」は“Linguisticulture”と名づけられた〔国際シンポジウム「言語文化学の可能性」組織委員会（1996）〕。「言語文化学」はまだ新しい学問であり、その研究対象や内容、方法など、確固としたものが確立されているわけではない。それらについて共通認識を構築しようとしているのが「言語文化学」の現状であり、発展途上の学問であるといつてよい。

本稿で問題になるのは、「学際性」とは何かということである。つまり、学際的な「言語文化学」とは、さまざまな時代や場所の言語学のプロパーと文学や文化学のプロパーを集結させた、総体としての2学科以上の学問をいうのか、それともひとりの学者が2学科以上の学問を担うのかという問題である。本稿は、津田が後者のタイプの学者であることを示し、「言語文化学」が学ぶべき先人として津田を位置づけようという試みである。

体としての津田学は、しばしば言われるような「津田史学」とよべるようなものか。津田は文学を研究対象にすることが多く、その意味で、津田学は単純な歴史学ではないといえよう。では、何と呼ぶのがふさわしいか。津田学の特質は、「言語文化学」というその学際性にある、というのが著者の仮説である³⁾。

津田の学問は「津田史学」と名づけられ、マルクス主義に影響されてきた戦後歴史学³⁾の中心人物であった石母田正 (1912-1986) と、同じく歴史学者であった家永三郎 (1913-2002) による理解が広く行われている。特に家永の『津田左右吉の思想史的研究』(1972) は、津田研究としては未だ大きな影響力がある。

本稿で彼らを引き合いに出すのは、2人が津田から大きな影響を受けていたからである。歴史学という枠のなかからの2人の理解は、津田学の本質を正しくとらえていただろうか。従来、津田学への一面的理解や誤解が指摘されてきており⁴⁾、戦後歴史学の舞台であった歴史学研究会による自己批判—戦後歴史学は制度としての歴史学、つまり自己を対象化できなかったということ⁵⁾—が出てきた現在、石母田や家永の津田理解に問題がなかったかを問う作業が必要であろう。

2人に共通して問題だと思われるのは、津田の戦前の著作ばかりを高く評価するという点である。なぜ津田の戦後著作は評価されることが少ないのだろうか⁶⁾。これは、「科学」としての歴史学とかかわる問題である。

1946年以降、津田はマルクス主義と「科学」に対する批判を展開しはじめた。これをきっかけに、一般の津田への評価はがらりと変化した。のちに詳しくみるように、この2人も一様に、津田の戦後著作に対して辛い評価をつけた。

戦後の津田の「科学」批判はなぜ受け入れられなかったのか。戦後歴史学は「科学」を標榜していたが、その科学主義の楽観性が批判されてきている⁷⁾。今、この時期の「科学」とは何だったかを問うことは無駄ではないだろう。本稿では津田の言説を研究資料とし、「科学」をキーワードに、津田学の本質を石母田正および家永三郎との影響関係のもと

³⁾ 戦後歴史学とは何かについては、歴史学研究会 (2000) 所収、二宮宏之「戦後歴史学と社会史」による、「戦前の日本資本主義論争の遺産を受け継いで戦後一斉に開花した社会科学的歴史学」という定義に従う。

⁴⁾ 井上 (1985) は、津田の記紀批判について、記紀に史的事実がないという説のみが強調され、記紀が思想の表現であり無上の価値を有するという点についてはあまり理解されてこなかったことを指摘している。そのほか、津田をめぐる誤解については拙稿 (2004) 参照。

⁵⁾ 西川長夫「戦後歴史学と国民国家論」、歴史学研究会 (2000) pp. 80-86.

⁶⁾ 津田思想の研究においては、家永 (1972) による、津田の戦後著作への過小評価が自明の前提と化している。大室 (1983) は津田における文学の問題をとりあげる点で示唆に富むが、家永 (1972) が指摘した、津田の戦前から戦後の「変貌」が自明の前提となっている。最新の研究では、藤原 (2003) なども戦前の研究を中心に評価している。戦後の著作のみを取り上げて評価したものに至っては、のちに見る石母田の著作をのぞいて皆無である。

⁷⁾ 二宮前掲「戦後歴史学と社会史」、歴史学研究会 (2000) p. 127. また、津田における「科学」への問いは、網野 (2000) と共有する。

に比較してとらえる⁹⁾。この作業によって、津田学がその学際性によって誤解ならびに一面的理解を受けてきたことを証明したい。

2 日本における「科学」という語の歴史

2. 1 戦前の「科学」用例

津田の「科学」批判の内容に入る前に、ここでは、日本における「科学」とは何かについてひととおり見ておくことにする。

「科学」という語はどこから生まれたか。一般的に学問をさす「科学」は、日本においては、1887年、ヘンリー・ハックスレー著『科学入門』を普及社が訳したのが最初だと思われる。その後、徐々に「科学」に関する著作が増えてゆき、国立国会図書館に所蔵されている限りにおいては、1945年までの間に3500あまりの「科学」に関する本が出されることになる。

試みに、読売新聞 CD-ROM 紙面データベース『大正の読売新聞』（1912年 7月30日から1926年 12月30日まで）・『昭和の読売新聞 戦前Ⅰ』（1926年 12月1日から1936年 12月31日まで）・『昭和の読売新聞 戦前Ⅱ』（1937年 1月1日から1945年 12月31日まで）を用いて「科学」の用例数を調べたところ、『大正Ⅰ』には1402件、『戦前Ⅰ』には4544件、『戦前Ⅱ』には3742件ヒットした。「科学」という語は、昭和初期に急激に広まったといえそうである。

「科学」は戦前・戦中において、いくつかの異なる文脈において用いられていた。つぎにそれを示すことにする。

2. 2 戦前・戦中における「科学」

エンゲルスの有名なパンフレット“Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft”を、1920年に『科学的社会主義』という題名ではじめて日本語訳したのは遠藤無水である。その後、昭和初期の唯物論の流行により、「科学」という語が急激に普及するにいたったと見て差支えないだろう。

エンゲルスは、ドイツ観念論を批判して以下のように言う。

…近代唯物論は本質的に弁証法的であり、他の科学の上に君臨するところの哲

⁹⁾ 本稿は、津田に関する思想史、史学史の研究をふまえた言語文化学の実証である。よって、津田、家永、石母田のそれぞれの言説が学問的言説であるということをひとまずおき、学問的であれ史的であれ、テクニカルであるという点において3人の言説は文学作品と変わらないと前提した上で、広義の比較文学的な手法を用いる。あくまでも津田左右吉を中心に据え、津田学の全体像を理解するという目的にそって家永、石母田との比較を行う。家永、石母田に関する詳細な研究は本稿の目的ではない。

学なるものは少しも必要でない。(略)従来の哲学全体の中で、なおも残存しつづけるものは、思惟とその法則とに関する学、すなわち形式論理学と弁証法のみである⁹⁾。(下線筆者)

一方、戦中においてまた別の「科学」をめざす者がいた。原理日本社を創設し、1939年から40年にかけて、『原理日本』という雑誌で津田を糾弾し、1940年、津田を出版法違反事件で起訴に至らせた蓑田胸喜は1941年、『学術維新』という書物を著した。ここでは、戦中のきびしい検閲をとった原理日本社の「科学」観について述べよう。蓑田は次のように記す。

高度国防体制の完璧を期するためには自然科学と応用技術との劃期的振興發達を要することいふまでもないが、之を日本的性格に陶冶育成し總力戰體系に綜合令活するものは現代俊傑の學としての精神科學であり、その基礎科學は體驗洞察の心理學である¹⁰⁾。(下線筆者)

以上、まずは戦前・戦中の日本にあった2種類の「科学」観について見た。マルクス主義が禁止されていた戦中日本においては、原理日本社の、神国日本の「國防」を目的とした「科学」が支配的だった。2種類の「科学」観は対照的である。エンゲルスが、哲学はほとんど「科学」でないというのに対し、蓑田は「精神科學」「心理學」の重要性を語る。マルクス主義の用語を使っていえば、エンゲルスの重視する「科学」は経済、社会等の下部構造の研究であり、蓑田の重視するそれは精神、思想、文化等の上部構造の研究であると、概ねにおいて言えるだろう。

津田は、「史學は科學か」(1951)の冒頭において、いろいろな意味の「科学」があることを指摘している。津田の「科学」批判は、戦前のこのような状況を見てのものであろう。一方、石母田正は1956年、科学的であることは唯物論的立場に立つことであると明言している¹¹⁾。戦後歴史学による「科学」が上記のようなエンゲルスの「科学」観から影響を受けていたことは、大筋において間違いない。しかしながら、この時期の戦後歴史学の論調には何度か方向転換が見出される¹²⁾。次章では、石母田との影響関係において、津田の「科学」批判にせまる。

⁹⁾ エンゲルス (1946) pp. 59-60.

¹⁰⁾ 蓑田 (1941) p. 1.

¹¹⁾ 石母田 (1989) p. 61.

¹²⁾ 戦後歴史学の動きについては、歴史学研究会 (2000) に詳しいので、併せて参照。

3 石母田正との影響関係においてとらえる津田学

3. 1 津田の「科学」批判と石母田正

戦後の津田は、マルクス主義批判とともに「科学」に対して徹底的に疑いのまなざしを向けた。「日本歴史の研究に於ける科学的態度」(1946)をはじめとして、「必然・偶然・自由」(1950)、「史學は科學か」(1951)、「歴史の學に於ける『人』の回復」(1952)など、批判の矛先を「科学」に向けた論文を次々に発表した。

津田が不信を抱いたのは、主としてマルクス主義の立場からの研究の進め方であった。「歴史家は何よりも先きに唯物史観そのものを問題として、それに歴史的事實に一致するところが有るか無いか、有るならばそれはどういふ點に於いてであるか無いならばどういふ點が一致しないのか、を細かにしらべて見るべき」であり、最初からマルクス主義的な見方で歴史をとらえるのは「史家のしごとではない」といい¹³⁾、マルクス主義的な「科学」を批判した。「生活」の連続であるところの歴史をとらえるために、史家の詩人的能力の重要性を説いた。

では、マルクス主義の立場にたつ歴史学者であった石母田正は、どのように津田とかわったか。石母田正の戦後の津田への批判は、1947年の「政治史の課題」にはじまる。この論文については天皇制の問題がかかわるのでここには記さないが、つづいて1949年の「歴史家について」では、津田の著作『歴史の矛盾性』の戦前版と戦後版の変化を検討し、ランケを引き合いにだして、津田に戦後、「政治的実践的なものからの乖離」がみとめられ、ランケと同様に歴史の法則性からの解放を試みたところに津田の学問的悲劇があるとした¹⁴⁾(この戦前から戦後にかけての変貌説が、後述する家永の説と共通することに注意しておきたい。津田は、戦前から戦後にかけて大きな思想の変化はないという¹⁵⁾のに、あくまで変貌を説くのは2人に共通する点である)。

「科学」に関してのみいうなら、この段階で石母田は津田の「科学」批判について言及していない。津田の「科学」批判に対する、マルクス主義の観点からの批判は1954年の「歴史叙述と歴史科学」をまたねばならないが、戦後すぐに、石母田が津田を論敵としはじめたことは指摘できるであろう。

石母田にとって1954年頃といえば、1948年から歴史学研究会大会などで議論が続けられていた英雄時代論争が一応の収束をみた直後である。英雄時代論争についてはかつて記した¹⁶⁾のでここでは簡単な説明にとどめるが、この論争のきっかけとなった石母田の主著『古代貴族の英雄時代』(1948)では、津田の記紀批判が先行研究にかかげられ、

¹³⁾ 津田 (1965 a) p. 116.

¹⁴⁾ 石母田 (1990) p. 11, 22.

¹⁵⁾ 家永 (1972) pp. 576-577. 昭和27年11月30日付の家永宛の私信でそう漏らしている。

¹⁶⁾ 拙稿 (2004) 参照。

歴史学と文学の間にある文学史の問題が俎上にのせられていた。この時期の石母田の試みは非常に学際的なものであったといえる。

また、同時期の「国民的歴史学」運動についても同様である。石母田が主導したこの運動は、民衆の歴史を民衆によって書くことをすすめたものであり、1955年の共産党の方向転換である六全協および1956年のスターリン批判によって終焉を迎えるが、民衆のなかに口述資料を求めるその手法は、柳田國男の民俗学的手法と似たものであった点¹⁷⁾において、歴史学の学際性への可能性を秘めていた。

1952年、自分は農村をよく知らない、「科学」は生活者の意識とは離れたものになってしまったと自己批判した石母田は、立場を変化させる。では、1948年から積極的にすすめられてきたこの学際性への試みは、それ以後どうなったか。

石母田はこの時期、「歴史叙述と歴史科学」(1954)、「歴史科学と唯物論」(1956)、「歴史観について」(1961)において津田を直接に論じている。以下では、この3つの論文について、石母田の津田理解を探る。

3. 2 「歴史科学」と文学

1954年の「歴史叙述と歴史科学」では、津田の「必然・偶然・自由」(1950)をうけ、マルクス主義の立場から、偶然の客観性について力説する。また1956年の「歴史科学と唯物論」においては、歴史学は相対主義を克服せねばならないとする¹⁸⁾。これは、歴史をどうにでも解釈できることを批判し、「科学的思惟」によって歴史をとらえることを説いたものである。この相対主義批判は、客観的世界とその法則をとらえる「科学」を擁護する論調のなかで述べられる。

石母田は、津田を正しく理解していたのだろうか。「歴史叙述と歴史科学」(1954)の中で石母田は、津田が経済史等の下部構造についての研究を評価しないと批判している¹⁹⁾。しかし、津田は1946年、「過去の史學者の深く注意しなかつた社會史・經濟史の研究が行はれるやうになつたのは、もとより喜ぶべきことであ²⁰⁾」るとはっきり書いており、石母田の指摘は誤りである。このことだけとってみても、石母田の津田理解には何らかの誤りがあることがわかるし、もっといえば石母田は津田の「科学」批判を批判するため、津田に対する不信感だけで、いささか拙速に津田を論じていたのではないかという印象はぬぐえない。

「国民的歴史学」運動において、無思想な実証主義を批判していたはずの石母田は1961

¹⁷⁾ 「国民的歴史学」運動については、小熊(2002)に詳しい。

¹⁸⁾ 石母田(1989a) pp. 89-93.

¹⁹⁾ 石母田(1989a) p. 36.

²⁰⁾ 津田(1966a) p. 131.

年の「歴史観について」で、津田が詩人的能力の必要性を説く点について批判する²¹⁾。また、津田は1950年の「必然・偶然・自由」で、歴史上の人物は未来を予見できなかったはずであり、現実を起こらなかった事態がもし起きていたら、と想像することや、人物の心情を想像することは、現実起こった事態の性質と歴史的意義を明らかにするための一つの助けになる、ということを主張しているが、その傍証として津田が出した源頼朝の例²²⁾について、石母田はエンゲルスの説をひき、ある豆のさやに6個の豆が入っている、5個でも7個でもなかったという事実の「原因をその因果の連鎖によって逆にたどっていこうとする科学がもしあったとしたら、それはもはや科学でなくて純然たるあそびごとであろう²³⁾」と、津田を批判する。

石母田にとって、「歴史科学」のためには、「なぜ」が重要であり²⁴⁾、「もし」は重要ではない。このことは、『歴史の矛盾性』という津田の著作において区別された「史學の二面」²⁵⁾、

- ① 史家が過去の時点に身をおき、未来を理解しえない視点にたってその生活過程＝歴史を叙述すること
- ② 史家が現在の時点に身をおき、過去を反省する視点にたってその生活過程＝歴史を叙述すること

のうち、石母田が①を積極的に認めようとしなかったことを意味する。史家が詩人的能力を発揮することで、歴史上の人物と気持ちを共有し叙述するということがない。津田が①の重要性を説くのは、想像力を発揮せよということだろうが、石母田はそれを認めなかった。これは石母田による相対主義批判の裏返しだろう。想像力は、「歴史科学」を相対主義的解釈に導く恐れのあるものだったのではないか。

このことは石母田だけの問題ではない。1955年、遠山茂樹らが著した『昭和史』は「人間が描かれていない」と批判されてしまう。これは、戦後歴史学が歴史を「科学的思惟」でとらえたことの限界だといえるのではないか。詩人的能力や文学的想像力によって歴史的人物の心情を汲み取ろうとしなかった傾向は、石母田のみならず、1950年代半ばの戦後歴史学全体にあったということになる。

²¹⁾ 石母田 (1990) p. 303.

²²⁾ 津田 (1965 a) p. 37. 「例へば、ヨリトモがもしヘイヂ (平治) の乱の後で殺されたならば、或は命を助けられてもイヅではない他の土地に、例へば四國か九州にでも、流されたならば、彼はカマクラを根據として平家をうち破るやうなことはできなかつたであらう」

²³⁾ 石母田 (1990) p. 15.

²⁴⁾ 石母田 (1990) p. 301.

²⁵⁾ 津田 (1965 a) pp. 172-184.

古代文学研究者である西郷信綱は、古典のテキストを単なる対象ではなく実践として捉え、その余白を読み想像力を発揮せよという²⁶⁾。津田の立場は、古代文学研究者のそれと共通するのである。石母田はこれ以後、文学への期待を書く²⁷⁾ものの、歴史学者として、以上のような文学研究者の姿勢を理解できなかった。これは、歴史学が文学を排斥したも同然であるといえるのではないか。

4 家永三郎との影響関係においてとらえる津田学

家永三郎は、正統派歴史学以外にも、思想史学、美術史学、哲学、仏教学などの膨大な著作をあらわした。家永の学問は非常に学際的にみえる。では、津田学と、家永の思想史学はどのように違うか。違いはすぐに見出せる。津田は自らの学問を「科学」と称したことがないのに対し、家永は、「実証科学」としての思想史学をめざしたという点である²⁸⁾。

家永は、歴史学および歴史教育に関する「科学」に対して疑いの言葉をのべた戦後の津田を評して、「これ（引用者註：記紀の説話）を科学的に理解するなど無用の言であるというとき、何故に津田がかつて記紀の研究にあれだけの巨大なエネルギーを投入しなければならなかったのか、彼自身のライフワークの意義を自ら否定するに等しい主張」であるという²⁹⁾。ここには、家永にとって津田の学問の価値が戦前の記紀批判にのみあるという考えがあらわれているとともに、戦後の著作によってその価値がなくなる恐れがあると家永が考えているのがわかる。では、なぜ家永はそのような捉え方をする必要があったのだろうか。

次には、戦前から戦後にかけて津田の立場が「変貌」したという家永の説に着目したい。前述のように津田自身は、自己の学説が敗戦を機に変化しなかったと主張していたのである。津田自身の言葉を疑う必要はどこにあるのだろうか。家永には、石母田と同様、「科学」を擁護しようという姿勢が見てとれる。また津田の「変貌」を説くのは、同じく「科学」擁護者である石母田と同様なのである。「科学」擁護とこの「変貌」説は、何らかのかかわりがあることが考えられる。

4. 1 家永による戦後改訂研究の再検討

ここでは、津田の立場が戦前から戦後にかけて一貫しているという説³⁰⁾に従い、この仮

²⁶⁾ 西郷信綱「テキストの行間と余白」、日本文学協会（1987）p. 6.

²⁷⁾ 石母田（1990）pp. 293-296.

²⁸⁾ 家永（1993）p. 37.

²⁹⁾ 家永（1972）pp. 449-450.

³⁰⁾ 上田（1973）は、津田が歴史の法則性を否定したことを戦前から戦後の一貫性だとのべている。本稿では上田説にしたがう。

説により家永論の再検討を行う。『文學に現はれたる我が國民思想の研究』と戦後改訂版の『文學に現はれたる國民思想の研究』（以下、戦前版／戦後版『貴族文學の時代』『武士文學の時代』『平民文學の時代』と略記する）、戦前版『神代史の研究』『古事記及日本書紀の研究』とこの両著をあわせて戦後改訂した『日本古典の研究』に関しては、家永によってくわしい異同研究が行われている。ただ、家永の研究では、戦前と戦後で異なる部分のみがとりあげられており、恰も戦前と戦後の変貌を前提としたようなやり方は問題だと思われる。津田は、これらの著作にかなり筆を入れているが、いずれもその論旨は変えていないという。

まず、「階級」という語に関して、家永は津田による戦前著作の戦後改訂のなかから、「階級」という語が使われなくなったものを4例見出している³¹⁾。家永はこれを「マルクス主義史家の愛用語への反感を前提とした」変化だとするのだが、津田が「階級」という語をすべて抜くわけではないことは家永の検討だけ見ても一目瞭然であり、これをもってマルクス主義への反感を説くには根拠に乏しい。

また、戦前から戦後にかけての一致点を見よう。戦前版『武士文學の時代』で、

さて斯ういふ素養のあるものが京に住むやうになり、又た其の社會的の位置が高くなれば、割合に早く貴族文化を學び得るのは當然であつて、足利氏が丁度其の好例である³²⁾。

というところを、戦後版『武士文學の時代』で、

かういふやうに、幾らかの文化的素養のあるものが、京に住むことになり、またその社會的地位が高くなれば、割合に早く京風の文化を學び得るのであつて、足利氏がその好例である³³⁾。

と、ほんの少しの表現しか変えない。ここには、経済・社会などの下部構造の要素が思想・文化などの上部構造の要素を規定するというマルクス主義の考えが現れており、津田がマルクス主義を全面的に否定しているのではないことがわかる。

戦後の津田のマルクス主義批判を、家永は「イデオロギー攻撃」だとして批判する³⁴⁾。たしかに津田の批判は、戦前の束縛を抜け出てマルクス主義がゆるされた戦後状況に合

³¹⁾ 家永（1972）p. 548, p. 563, p. 564.

³²⁾ 津田（1917）pp. 170-171.

³³⁾ 津田（1951）p. 180.

³⁴⁾ 家永（1972）p. 450.

わせて出てきたものではあろう。しかし、津田は、「先づ」唯物史観をあてはめて歴史を解釈することを批判したのであり、みずからの史観を絶対視することを避けた。戦後の津田のマルクス主義批判は、家永のいうような戦後マルクス主義者への「イデオロギー攻撃」ではなく、津田自身が戦前から含み持っていたマルクス主義的な前提に対する自己批判であったと見るべきではないか。その自己批判は十分なものではなく、津田はしばしばマルクス主義を理解していないと指摘されることになるが、津田は決してほかのマルクス主義者だけを批判していたのではないといえよう。

では、なぜ家永はあえて、津田の戦前から戦後の変貌を説く必要があったか。次に、津田と家永の立場の違いを見たい。

4. 2 「歴史科学」と心理学

津田学と家永史学の違いは、以下にみる言説に典型的に現れている。津田は1925年12月26日の「日信」に、柳田民俗学を評して、

手まり歌を考へるには、かういふ子どもの心理を顧慮する必要があると思ふ。
柳田の考には、此の点が欠けてゐるのではないかと感じた³⁵⁾。

という。ここには、子どもの心理を重視しようとする津田の考え方が表れている。家永は、この津田の「日信」を引用した上で、以下のように評価する。

右に見られるがごとく、個人心理的観点からの批判が強く、子どもの手まり歌に民間伝承を見出そうとする柳田民俗学の独自の発想をくみとる意図は見られない³⁶⁾。

津田は、思想や精神を「心理上の事実」とよび、それを「歴史上の事実」とする考え方を、戦前から戦後にかけて一貫して持っていた³⁷⁾。この考え方に、文学の作者や、文学の登場人物といった個人レベルの心理を重視し、その人間心理を歴史学にまで高めようとする意図があらわれているとするならば、それは歴史学や文学のみならず、心理学を重視する考え方であるといえよう。だが、このように津田を理解する家永史学は、やはり津田の学問とは違う。家永の学問は、「思想史学」でありながら、心理学を重視しない

³⁵⁾ 津田 (1965 c) p. 144.

³⁶⁾ 家永 (1972) pp. 262-263.

³⁷⁾ 津田 (1966 b) p. 199. この見解は、出版法違反事件控訴審のさいの上申書にも津田の手によって書かれ (津田 (1965 b) p. 380)、戦後これを改訂した『日本古典の研究』でも変化しない (津田 (1963) p. 9)。

ものだった。

津田は戦前から戦後にかけて、心理学重視という原理日本社と共通する考えを持っていた。家永は、戦前から戦後にかけて津田の基本命題の変化がないことに気づきながら、津田の学問の価値を戦前のもののみに置き、さらには戦後の津田に「蓑田胸喜の亡霊」がついたと揶揄した³⁸⁾。これは誤りという他ない。津田は戦前から、原理日本社の「科学」と同様、心理学を重視していたからである。

この誤りをもたらしたのは、「科学」としての家永史学の心理学軽視であろう。それは、マルクス主義の文脈から出た「科学」という語につきまとう、精神や心理を軽視する考え方があらわれたものである。家永は、石母田と同様に、マルクス主義的な「科学」を客観視できなかったということではないか。

5 おわりに

以上からわかるように、津田学は文学研究の形をとりながら歴史学の要素、思想史学の要素、心理学の要素をも含むという学際的なものであった。こうした津田の研究は「言語文化学」として位置づけられるにふさわしい。しかし、この学際性はのちの歴史学によって一面的に理解されるにいたった。

家永と石母田は同世代である。2人はともに戦争を食い止められなかったことを悔やみ、それを学問へのモチベーションとし、「科学」を自明のものとして擁護した。津田の「科学」批判は、2人にとって好ましいものではなかったのである。

石母田と家永に共通する、戦後の津田の著作に対する過小評価は、マルクス主義に影響された「歴史科学」のイデオロギーによるものであった。マルクスとエンゲルスから受け継がれた「科学」は、元々哲学や心理学を排斥しがちだったが、それは英雄時代論争と「国民的歴史学」運動のあと、石母田の学説によって顕著になった。石母田の英雄時代論争と「国民的歴史学」運動は、歴史学の学際性への試みであったが、論争は政治的であったと反省され、その後の議論の機会を失ってしまう。その結果、歴史学は「科学」の名のもとに、他の学問との融合を好まなくなった。石母田においては文学、家永においては心理学を、「歴史科学」から排斥してしまった。このことが津田学への一面的理解や誤解につながっている。

津田の戦後の「科学」批判は、今こそ大きな意義を持つ。「科学」を目指す者は、津田の「科学」批判を無視してはならない。それは「科学」イデオロギーを無視することの意味する。津田は、学問と「科学」を区別したのである。このように、津田学について

³⁸⁾ 家永 (1972) p. 473.

考えることは、学問について、また学際性とは何かについて考えることであり、ひいては「言語文化学」について考えることである。マルクス主義から影響を受けた「歴史科学」が文学や心理学を排斥しなければならなかったのだとすれば、「科学」の条件は学際性を持たないことだ、ということになってしまう。もしそうなら、学際的な「言語文化学」のあり方も、問われることになる。

「言語文化学」は歴史の浅い学問であり、共通理解の構築にむけてこれからも活発に議論されねばならない。だが、「言語文化学」の未来への可能性は、やはりその学際性にあり、その発展にとって津田学は欠かせないことを提言しておく。津田学の本質を知り、批判するという仕事は、これまで「歴史科学」の仕事としてほぼ独占されてきた。「歴史科学」がこれからも非学際的な学問であるなら、学際的な性格をもつ津田学は、今や学際的な性格をもつ「言語文化学」による理解によって、批判され乗り越えられて行かなければならない。今回は言及できなかったが、天皇を中心とする、異質なものの不在を前提としたナショナリズムは津田学の問題点である。それを乗り越えていくのは、「言語文化学」の仕事であろう。

《引用文献》

津田左右吉『文學に現はれたる我が國民思想の研究 第二卷』（洛陽堂、1917）

——『文學に現はれたる國民思想の研究 第二卷』（岩波書店、1951）

——『津田左右吉全集 一卷』（岩波書店、1963）

——『津田左右吉全集 二十卷』（岩波書店、1965 a）

——『津田左右吉全集 二十四卷』（岩波書店、1965 b）

——『津田左右吉全集 二十七卷』（岩波書店、1965 c）

——『津田左右吉全集 二十八卷』（岩波書店、1966 a）

——『津田左右吉全集 別巻第一』（岩波書店、1966 b）

蓑田胸喜『學術維新』（原理日本社、1941）

エンゲルス著 大内兵衛訳『空想より科学へ』（岩波文庫、1946）

家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』（岩波書店、1972）

——『日本思想史学の方法』（名著刊行会、1993）

上田正昭編『人と思想 津田左右吉』（三一書房、1973）

大室幹雄『アジアタム頌 津田左右吉の生と情調』（新曜社、1983）

井上光貞『井上光貞著作集 第10巻』（岩波書店、1985）

日本文学協会編『日本文学講座Ⅰ 方法と視点』（大修館書店、1987）

石母田正『石母田正著作集13巻』（岩波書店、1989 a）

- 『石母田正著作集 14 巻』（岩波書店、1989 b）
- 『石母田正著作集 15 巻』（岩波書店、1990）
- 国際シンポジウム「言語文化学の可能性」組織委員会編『言語文化学の可能性：現在と未来：国際シンポジウム報告書』（同組織委員会、1996）
- 伊藤雄志「文化理解をめぐる一津田左右吉の日本文化論」（『比較文化研究』No.44、日本比較文化学会、1999.7）
- 歴史学研究会編『戦後歴史学再考』（青木書店、2000）
- 網野善彦『歴史としての戦後史学』（日本エディターズスクール出版部、2000）
- 読売新聞社メディア企画局データベース部編『大正の読売新聞』CD-ROM 版（読売新聞社、2001）
- 『昭和の読売新聞 戦前 I』CD-ROM 版（読売新聞社、2002）
- 『昭和の読売新聞 戦前 II』CD-ROM 版（読売新聞社、2002）
- 小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社、2002）
- 藤原秀之「津田左右吉の著作とその評価—『神代史の研究』『古事記及日本書紀の研究』を中心として」（『歴史と地理』565 号、2003.6）
- 一瀬陽子「ある知識人の表象—津田左右吉をめぐる『古代史学』と『古代文学』—」（『言語文化プロジェクト 2003 表象と文化 I』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科、2004）